て、至つて薄く輕し、尤糸底なし、香臺など附たるは、總て後世の作なるべし、下地黑漆の上、總金箔押たるが、時代にて摺はげ、所々に些づゝ金箔のかすり殘りたり、芒金蒔畫、露錫粉、外同箔押摺禿蒔繪なし、則ち圓きを月に擬へ、武藏野の月の景色を象りしなり、和漢三才圖會按云、〇略中爾有ば古代の杯に糸底なきは、土器に准ふが故なる事明けし、鎌倉雪之下大井氏の藏する、和田酒宴の盃、又同所敎恩寺の藏たる、北條泰時の杯、徑四寸許、黑漆地の上、總金箔押描金ありて、製作此武藏野同樣なり、又河內國錦部郡古野の極樂寺の什物たる、源廷尉義經朝臣より軍功によつて、那須與市宗高に賜はりし盃も尙是に同じ、尤前にいふ織部といふ小き杯は、古田織部正の好にして、遙に後世の作也、既に其頃には糸底香臺等をも附て、今時の器のごとく成しなるべし、

〔吾吟我集八〕むさし野より、富士をながめて、

盃の名にながれたる武藏野に富士をたぐへて蓬萊の臺

〔好色三代男四〕又戀かへて難波若衆

此可笑さも餘り過て、暮るゝ頃は、五月雨間なく降れば、世上しつほりして、盃も熊谷ずりむさしのに替り、重箱にのみかゝれば、〇略下

〔置土產四〕大晦日の伊勢參わら屋の琴

それより四五日も過ぎて、熊谷の大ぶりなる金の盃と、珊瑚珠の盃と重ねて、太夫に取らせければ、更に喜ぶ氣色も無く、金盃は庭掃く男に取らせ、珠の盃は雙六盤の下に敷きて、微塵に碎きすてける、

〔世間長者容氣二〕振舞に膳をすはりのよい長者

御亭主方よりお目かけて、向後ござつても、やらせらるゝ爲に、御盞頂かせて下されよ、先身共から始めませうと、盃取上しが、大盃を出せとくまがへを取寄せ、〇略下